

すず き まさ きち

鈴木政吉



鈴木政吉 (1859 ~ 1926)

写真：鈴木バイオリン(株)提供

甘利の和製バイオリンを見て、その音色に心を惹かれ、徹夜でそれを模写し、バイオリンを完成させた。苦心のバイオリン初作を恒川に見せたところ、恒川の賞賛と激励を受けた。その言葉を励みに手掛けた第二作が売れ、その後も恒川の門人らから注文も舞い込んでくるようになり、助手数名を雇うようまでになった。

1889 (明治22) 年、東京音楽学校で伊沢修二とお雇い音楽教師のルドルフ・デイトリッヒに政吉のバイオリンで演奏してもらい好評を得た。デイトリッヒは、鑑定の結果「東京市内にも2、3か所で製作して



1990年代の鈴木バイオリンの工房 (撮影：石田正治)

を完成させていった。そしてマンドリン、大正琴、ギターなどにも手を広げ、大府、恵那工場などを拡張し、バイオリン大量生産の体制を樹立、世界的な楽器メーカーとなった。1930 (昭和5) 年、個人経営から(株)鈴木バイオリン製造に改組した。

■アインシュタイン博士が絶賛した鈴木バイオリン

1926 (大正15) 年、政吉の長男梅雄、三男鎮一がドイツに留学する時に、政吉が研究苦心の末に完成したバイオリン数本を託し、ドイツのバイオリン製作者等の多数を訪問させた。その成果は「クレモナ巨匠の遺作に匹敵する絶品」という賞賛の声であった。梅雄、鎮一兄弟が渡独した際の賞賛の評価を出した人の中に、相対性理論の提唱者で有名なアルベルト・アインシュタインがいた。アインシュタインはバイオリンをこよなく愛し、天才バイオリニストのフリッツ・クライスラーの友人であった。アインシュタインが政吉の作品を手にした折、ドイツ人製作の愛用のバイオリンと弾き比べ、「音の出方、音の価値については到底貴下の父親の作品に比する価値はない。自分の一生は勿論、永く家宝として愛用したい。」ともらしたという。また、アインシュタインは、梅雄、鎮一兄弟の前で政吉のバイオリンで演奏し、政吉に賞賛の手紙を送っている。

(寺沢安正、石田正治)

海外で評価された華麗な音色

—日本のバイオリン王—

鈴木政吉は、1859 (安政6) 年尾張藩士鈴木正春の長男として名古屋市東区宮出町で生まれた。父正春は藩士であったが乏しい家禄では家族6人を養うことができず、細工好きの腕を琴・三味線作りの内職に役立てて生計をたてていた。

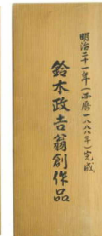
1873 (明治6) 年、政吉は、従姉の嫁ぎ先である東京浅草の塗物商飛騨屋の奉公人となった。奉公生活は約3年間であったが、日々酷使されたが苦境に耐えながらも、読売仮名付新聞で文字を覚えたり、塗りの技を磨いた。

1877 (明治10) 年、奉公先から帰り、琴、三味線づくりの家業を引継いだ。

■鈴木政吉とバイオリンの運命の出会い

琴、三味線づくりでは、大工の半分も稼げない苦境の中、政吉は高給が望める音楽教師になることを志し、父の奨めで長年稽古していた長唄の稽古仲間のついで、1887 (明治20) 年に愛知県師範学校音楽教師恒川鏗之助の門を叩いた。入門後、まもなくして同門の甘利鉄吉に出会う。その

政吉翁創作品 第一号



鈴木政吉のバイオリン第一号

写真：鈴木バイオリン(株)提供

いるが、この品には到底およばない。和製品としては今日第一位を占めるものである」と評価した。政吉は大いに自信を深めた。

1890 (明治23) 年、東京上野公園で開催された第3回内国勸業博覧会に山葉寅楠がオルガン、政吉はバイオリンを出展し、この時から二人の交流が始まった。お互い楽器製作の同士であったこと、山葉が8歳年上であったことなどから兄弟同様の交遊が続き、1899 (明治32) 年に山葉がアメリカに視察した時には、政吉のバイオリンを預かり持参した。

1890 (明治23) 年から自宅を工場にして生産を始め、明治30年代には鈴木バイオリンの国内市場のシェアは80%に達した。その後、1900年にバイオリン頭部・スクロール部の自動削り機 (= 渦取器)、表板と裏板に丸みを持たせる加工の甲削機など